

## 鎮守の杜の社会的位置付けと認識の変遷に関する考察

○小林 和樹 [東京農業大学] △栗田 和弥 [東京農業大学]

キーワード：鎮守の森 神社林 社叢 変遷

神社の境内には神が降り立つ場として必ずといっていいほどに樹木が存在する。特に多くの樹木が植えられたり、自然林として守られていたりする森林は鎮守の杜、社叢と呼ばれている。その鎮守の杜は昔から里の中心となり神々が住む森として人々に崇拝されながらも親しみをもって接しられてきたとされている。しかし、現代に生きる我々にとって鎮守の杜はそのようなものである、その認識は異なってきたと考えられる。崇拝することや親しみをもつどころか、その逆の接し方をしている場合もあるのではないだろうか。鎮守の杜のその背景には時代の流れによって変わってきた人々の生活や社会構造の影響で鎮守の杜に対する認識が以前と比べると弱いものになったという事が挙げられると考えられる。そこで本研究では「鎮守の杜」「神社林」「社叢」「神奈備」といわれる森を対象に、明治以降から現代に至るまでの著書による文献調査を実施し、鎮守の杜の位置付けの変遷を明らかにしていく。生物学・民俗学・宗教学・建築学といった様々な分野からの主張があり、それらを整理し、比較考察を行った。

## 登山道の距離測定（測距）方法に関する基礎的研究

○小倉敬生 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：登山道、距離、御岳山、秩父多摩甲斐国立公園、関東ふれあいの道

登山は、近代までは主として信仰の対象として、現代では余暇時間の増大と共に健康志向として注目されたり、深田久弥の山岳随筆『日本百名山』（1964）が出版されたこと等に起因するとされる。また、ごく最近では高尾山がミシュラン社により三ツ星の観光地に選出され、日本人が関心を持ったとされる。ところで、登山を計画あるいは実施する場合には、市販されている山岳地図の表記や、登山道中の案内板等の所要時間の表示を参考にする。しかし、それらには登山道の距離を記したものは多くない。ひいては、わが国の登山道の総延長はどれだけあるか未知であると考えられる。しかし、登山道の全長や距離に着目した調査事例は、多くは見出せない。一方、イギリスではフットパスの総延長は20万kmとも言われ、一般的に知られている。そこで本研究では、簡便な方法で登山道の距離を把握する方法論の検討を行った。対象地は秩父多摩甲斐国立公園で、距離が既知である関東ふれあいの道（首都圏自然歩道）のルートにもなっている東京都青梅市にある御岳山周辺の登山道を対象として、様々な直接的・間接的距離測定方法で計測し、同時に計測時間や困難度・容易度も判定した。それらを元に簡便な計測方法の検討を行った。